

権謀術数渦巻く「教皇選挙 コンクラーベ」(エドワード・ベルガー) 松岡 勲

5月下旬に久しぶりに映画を見た。白内障手術と脊椎の圧迫骨折で長らく映画を見られなかった。映画館までの移動が大変だった。転倒した時に再度骨折になることを恐れて、自転車をやめた。バス停で降りて、映画館まで歩いた。とても疲れた。

見た映画は「教皇選挙 コンクラーベ」(監督:エドワード・ベルガー)だった。ちょうど今回の教皇選挙と新教皇・レオ 14 世の誕生と重なり、グッドタイミングだった。

カトリック教会の権力を握るローマ教皇が、死去した。悲しみに暮れる暇もなく、ローレンス枢機卿(レイフ・ファインズ)は新教皇を決める教皇選挙<コンクラーベ>を執り仕切ることになった。世界各国から 100 人を超える強力な候補者たちが集まり、システィナ礼拝堂の扉の向こうで極秘の投票が始まった。票が割れるなか、水面下で蠢く陰謀、差別、スキャンダルの数々にローレンスの苦悩は深まっていく。

この映画のおもしろいのは、現実世界の状況をビビッドに反映し、映画のストーリーに繰り込んでいることだ。カナダの右派の候補者のトランブレ(ジョン・リスゴー)はいかにもアメリカ大統領トランプを思い起こさせる。途中で女性問題の過去の事実が暴露され、失格するアフリカ・ナイジェリアのアディエミ(ルシアン・ムサマティ)など。そして極めつきは、最終的に新教皇に選出される、メキシコ出身で、子宮を有するインターセックスのベネテス(カルロス・ディエス)。彼は自身の身体的特徴をそのままに教皇として生きることを受け入れる。「教皇選挙」はイタリア映画で、戦後のイタリアリアリズム作品やフェデリコ・フェリーニなどの数々の名作を輩出したチネチッタ撮影所で作られた。

さて現実の教皇選挙はどうだったか。今年、5月8日、バチカンのシスティナ礼拝堂の煙突から白い煙がでた。それはコンクラーベで次期ローマ教皇が決まった知らせだった。先に亡くなったフランシスコ教皇の後継者になったのは、ロバート・プレヴォスト、新教皇名はレオ14世、史上初のアメリカ人教皇だが、実際にはペルーの教区で活動し、ペルーの国籍も取得していて、アメリカ合衆国出身者そしてペルー市民としては初めての教皇である。今回のコンクラーベについては、リベラルな教皇であったフランシスコ前教皇の路線が継承されるのかどうか問題だった。そのことに関して、いくつかの論評を引用しておく。

「コンクラーベに裏でMAGAカトリック(保守派のカトリック)はリベラルな教皇が選ばれないよう画策した。」「だが、彼らの陰謀は無駄だった。コンクラーベに参加した133名のうち8割がフランシスコ教皇に任命された枢機卿だったから。」「新教皇に選ばれたプレヴォスト教皇(レオ 14 世)は今年 2 月に X で「ヴァンス副大統領は間違っている」という記事の見出しを引用していた。もちろん移民排斥についてだ。しかも、プレヴォスト司教は教皇名を「レオ 14 世」とした。資本主義の行き過ぎに警鐘を鳴らし、労働者の権利を養護した18世紀の教皇レオ 13 世に敬意を表したそうだ。」「(町山智浩の言霊 USA)171 回、「週刊文春」)

「(新教皇が)アウグスティノ会総長だった 12 年の演説では、教義を重んじる立場から、同性パートナーと養子からなるオルタナティブファミリーがテレビや映画に同情的に描かれている。」と警鐘を鳴らした。そんな人物の選出を歓迎しそうな勢力の一つは、対立に手を焼いてきたバチカン官僚だった。(中略)「教義と伝統」の観点から、手を広げ過ぎた刷新路線が整理整頓されるかもしれない。」「歓迎するもう一人は米・トランプ大統領だ。レオ 14 世はこれまでのトランプの移民政策を批判しているが、家族観でカトリック保守派の常識に近いとみられ、それはトランプ支持層と一致する。」「(広野政嗣「ジャーナリストの目」637 回、「週刊現代」)

「また、司教としてペルーで在任中、「ジェンダー・イデオロギーの推進は混乱を招く。」「存在しないジェンダーを作り出している。」などと述べ、学校でのジェンダー教育に反対する姿勢を示したほか、同性愛者に対しても一定の距離を置く発言をしたとも伝えられている。」「(「g-lad xx」2025.5)

以上、見てきたように実際の「教皇選挙」には社会倫理と国際政治のせめぎ合いがあり、非常に興味深かった。

